

ガーデニング

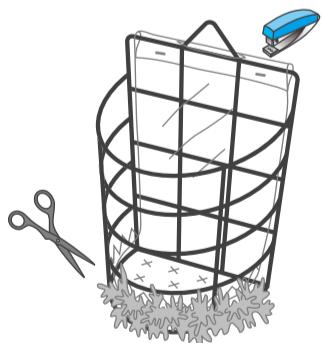


ハンギングバスケットの作り方

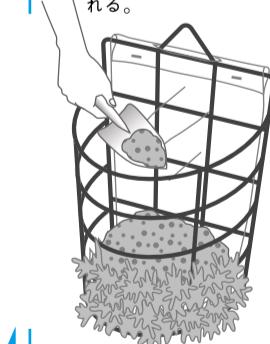
ハンギングバスケットに寄せ植えする場合は、同じ環境で育つ性質を持つ植物を選びましょう。また、たいへん乾燥しやすいので、乾燥に強い植物を選ぶことも大切です。

壁掛け式タイプのワイヤーバスケット

1 底に水ゴケを敷いてから、底から背面にかけてビニールシートを敷く。背面の縁をずれないようにホッチキスで止め、底部分はハサミで水抜き用の穴を数箇所空ける。



2 ハンギング専用の培養土か、赤玉土5・ピートモス3・バーライト2の混合土に元肥として緩効性の化成肥料を適量混ぜた用土を深さ1/3程度まで入れる。そのとき、用土が流れ出ないように、ワイヤーにそって水ゴケで壁を作りながら、土を入れる。



3 ワイヤーとワイヤーの間から花やヘデラ類を植えていく。1株植えたら、ワイヤーにそって水ゴケで壁を作り、土を添え、軽く押さえ。この作業を繰り返し、バランスを見ながらていねいに植えていく。



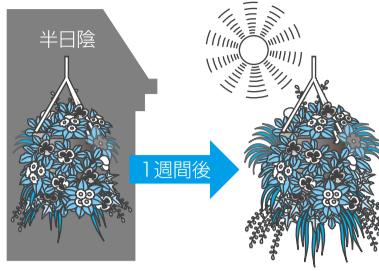
4 上まできたら、水ゴケで最上段のワイヤーをくるむようにしてから、花材を植える。下にかなりの量の根が入っているので、ていねいに押し込みながら植えるのがポイント。植え終わったら、表面も水ゴケで覆う。



ハンギングバスケットの管理

置き場所

空間に掛けるものなので、重さに耐えられるかどうか、チェックして、落下しないようにしっかりと固定すること。植えてからすぐは1週間ほど、半日陰に置いてから、徐々に日光に当てるようにすると花が弱らない。また、全体が均等に成長するように、掛ける場所を変えたり、回転させるなどして、全体に平均して日光が当たるように工夫するとよい。



整形

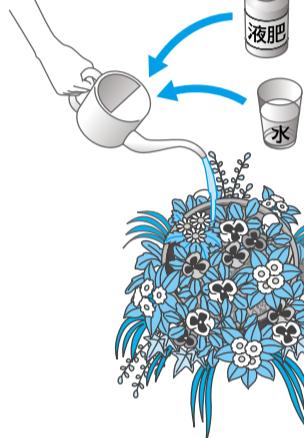
伸び過ぎた葉や茎などは全体のバランスを見てカットして、整形すると美しいまま楽しむことができる。また、枯れた葉や花はこまめに取り除くこと。

水やり

ハンギングはたいへん乾燥しやすいので、表面が乾いたらフックからはずして、下から水が流れるくらいたっぷり水をやるようする。

肥料

1週間~10日おきくらいの間隔で、水で希釈するタイプの液体肥料を水やりの水に混ぜて与える。



病害虫駆除

オルトランやアンチオなど、粒状の薬剤を株元にばらまいておくとアブラムシやカイガラムシといった病害虫の防止になる。

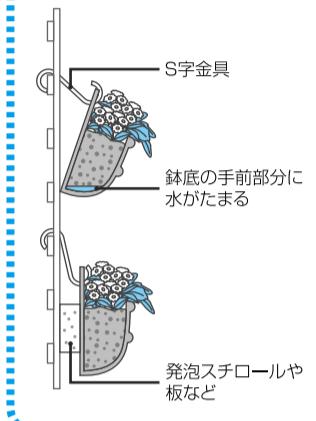
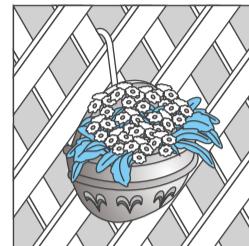


ハンギングバスケットの楽しみ方

One Point Advice

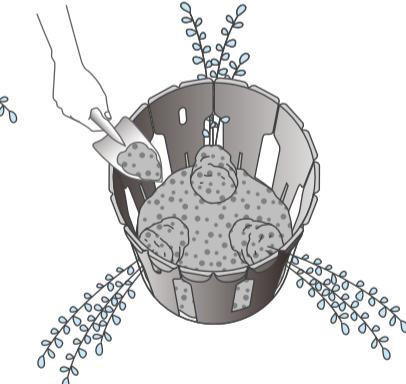
まずは小さな壁掛け式テラコッタで1~2種類の花材から

ハンギングバスケットを作るのは初めてという方は、あまり欲張らずに、小さな壁掛け式のテラコッタに1~2種類の花を育てるところから始めましょう。これなら通常の鉢植え感覚で楽しむことができます。



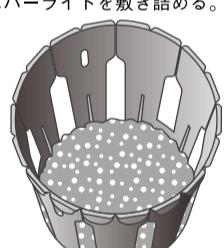
壁掛け式テラコッタは、S字金具でフェンスやトレリスなどに掛けて使いますが、これだと鉢が手前に傾いて鉢底の手前に水がたまり、水はけが悪くなることがあります。そんな場合は、鉢とフェンスの間に発泡スチロールや板などを当てて真っすぐにしてやるようしましょう。

3 すき間を埋めるように土を入れる。用土はハンギング専用の培養土か、赤玉土5・ピートモス3・バーライト2の混合土に元肥として緩効性の化成肥料を適量混ぜたものを使うとよい。



吊りタイプのプラスチック製バスケット

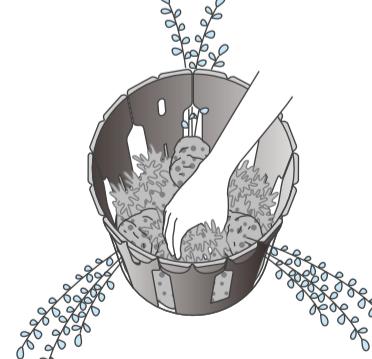
1 上部カバーをはずしてから、側面のスリットよりやや下を目安にパーライトを敷き詰める。



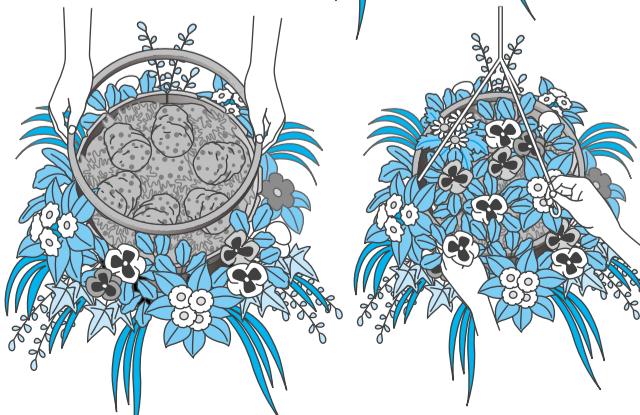
2 ポットから取り出した苗の根を軽くほぐし、根や茎を傷めないように気をつけながら、スリットの上からスライドさせて入れる。三角形の形状に植えていくと、どの方向からもバランスよく見える。



4 土がこぼれないように、水ゴケを上からスリットに押し込むように入れる。その後、2~4の作業を繰り返して上部まで花材を植える。時々、バスケットを持ち上げてトントンと下にたたき、すき間に土を足すようにすると、苗のおさまりがよくなる。



5 スリットの一番上まで花材を植えたら、カバーをつけ、上部にも花を植えてすき間に土を入れたあと、水ゴケで表面を覆う。最後にバスケットを吊り紐をかけて飾る。



水ゴケで壁を作るのが難しい場合は不織布やウレタンなどを中敷きに使って植える方法もあります。普通、これらはバスケットとセットで売られていることが多いのですが、中敷きが破れた場合は、不織やウレタンシートでつくることも可能。最近は、不織布や紙製の中敷きも市販されています。

